

質的調査に基づく津波犠牲者発生プロセスの分析 —宮古市田老地区の事例—

Analyzing Circumstances of Tsunami Victim Deaths Using a Qualitative Survey — Cases of Taro District, Miyako-city —

○重川希志依¹, 田中聡¹, 阿部郁男¹
Kishie SHIGEKAWA¹, Satoshi TANAKA¹ and Ikuo ABE¹

¹常葉大学大学院環境防災研究科

Graduate School of Disaster Research, Tokoha University

In the present study, circumstances of tsunami victim deaths, how they lost their lives in the Great East Japan Earthquake, were investigated. Awareness of tsunami evacuation and factors affecting it were analyzed. Furthermore, it was clarified how roles in families and communities, and predictable and unpredictable events had influenced the affected processes. Specific factors leading to their deaths were also identified. The ethnographic survey was focused on cases in Taro district, Miyako-city, and bereaved families of seven victims were interviewed.

Key Words : tsunami victim death, Taro district, ethnography, qualitative survey, the Great East Japan Earthquake

1. はじめに

これまで、東日本大震災時の津波避難行動に関する様々な学術調査が実施されてきており、津波特性、過去の被災経験、避難手段、個人の津波避難意識などを指標とした避難行動分析が行われている¹⁾, ²⁾。これらの調査は生存者に対するヒアリングや質問紙調査を通して、避難行動の特性と各種要因との関係性を把握したものである。一方、犠牲者が生じた要因を明らかにしたものであるとして三上、鈴木らの調査があるが、いずれも人的被害発生の過程に影響を及ぼした要因について、統計的な手法を用いた分析を行っている。本研究では、東日本大震災の津波により生命を落とさざるを得なかった方たちの個々のケースの被災過程と影響を及ぼした理由や背景を含め、犠牲者の発生につながった個別具体的な要因を明らかにする。調査対象地域は宮古市田老地区とし、7名の犠牲者の残された家族へのエスノグラフィー調査に基づき研究を実施した。

2. 調査対象地域の概要

岩手県宮古市は、明治29年三陸津波、昭和8年三陸地震津波、昭和35年チリ地震津波、昭和43年十勝沖地震津波など、これまで繰り返し津波による甚大な被害を被ってきた。とりわけ旧田老町(平成17年に宮古市と合併)では津波による犠牲者数が極めて多く、人家を津波から守るための長大な防潮堤(第1防潮堤)が昭和9年~33年という長い年月を費やし築かれた。また第1防潮堤よりさらに海側に住居地域を拡大するために、昭和37年~54年にかけて第2防潮堤が築かれた。また防潮堤による対策のみならず、長年にわたり月に1回は地域ぐるみで津波避難訓練を実施するなど、非常に熱心に津波避難対策に取り組んできた。

東大地震研究所調査によると、東日本大震災の第一波は宮古市では14時48分に到達し波高は20cm、最大波は15時26分に高さ8.5m以上とされ、また田老地区では小

堀内地区で津波遡上高37.9mが観測されている。東日本大震災発生当時、宮古市全体の人口は60,124人、死者・行方不明者は517人で、死者発生率は0.9%であるが、田老地区に限定すると死者発生率は4.1%と宮古市内で最も高い犠牲者発生率となっている。

3. 研究の方法

(1) 研究の準備

研究の発端となったのは、宮古市防災担当職員の「震災以降、宮古市の中でも津波防災意識に大きな温度差があり、市民の防災意識を高めるためには通り一遍の情報を伝えるだけでは限界がある」という一言であった。それ以降筆者らは市職員と検討を続け、津波防災意識が高いと考えられていた田老地区においてなぜ多くの犠牲者が発生してしまったのか、その個別具体的な理由や背景を明らかにし、今後の津波防災対策に生かすことを目的に調査を開始した。要因解明は非常にデリケートな問題に触れることであり、調査には細心の注意が求められ、調査に協力していただく方たちとの信頼関係が築かれていなければ実現することは不可能である。このため東日本大震災以降、支援活動等を通じ、宮古市の消防団や行政職員、地域コミュニティリーダーとの間に信頼関係を培ってきた。今回の調査では、宮古市社会福祉協議会会長の協力を得て、調査の趣旨を説明した上で協力していただける7世帯を選定した。

(2) 調査方法

津波により犠牲となった7名の方の家族を対象に、震災以前の暮らしから地震発生時の状況、津波により被災するまでのプロセスについて、エスノグラフィー調査を実施した。調査実施時期は平成29年3月27日~3月30日、各世帯ごとに個別に聞き取り調査を行った。1回の聞き取り時間は約2時間である。津波犠牲者の震災当時の居住地を図1に示す。



図1 対象者の震災当時居住場所 (Google Earth に加筆)

4. 調査結果の概要

以下に津波により犠牲となった方並びに残された家族の①世帯と住まいの状況、②被災時の状況、③津波に対する意識、④今後のこと、の4項目に分けて調査結果の概要をまとめる。

(1) ケース1：50代女性、夫が犠牲となる

①世帯と住まいの状況

夫は田老生まれの田老育ち。漁業と林業に従事し一生懸命働いていた。妻は岩手県山田町の山間部から、昭和63年に嫁いで来た。

②被災時の状況

震災当日、夫は腕の怪我の治療で宮古市内の病院へ行き、妻も同行。治療終了後夫は先に田老に戻り、妻は宮古駅前で購入物をしていた。地震発生直後、夫に電話をし、自宅に戻っていることを確認したが、その電話の声が最後となる。避難所から遺体安置所に毎日通う。震災の年のお盆に、寺に預けられた骨壺が夫のものとなる。遺体は自宅から300m先の土手で、真っ黒焦げになり座った状態で発見されていた。

③津波に対する意識

夫は普段から地震があったら自宅の裏山に逃げると言っていた。地震後に家の片付けでもしていたのか分からないが、結局裏山には逃げていない。第2防潮堤は住宅地を作るために作ったと聞いており、皆安心してこっちに来た。夫も堤防を超えて来るとは思ってもいなかったと思う。姑が建ててくれた家だが、なぜ海の近くを選んだ建てたんだろうと思っていた。姑は、ここまでは津波は来ないと言っていたが、私は海からちょっと離れた場所がよかったと思っていた。夫が退職後には違う所に土地を買って家を建てようと言っていた。

④今後のこと

旦那が亡くなって結構お金ももらったけど、そういう皮肉も言われたがくじける訳にもいかない、何度か涙は流した。いろんなことを一人でやって、もう後をついていこうかなと思った日もあったしつらかった。やはり家族のある人たちは感じないと思う。6年経つが、一段落ついた、復興したという感じはない。

(2) ケース2：70代女性、夫が犠牲となる

①世帯と住まいの状況

夫は田老生まれ田老育ち。遠洋漁業と小型の漁船を自分で持ち、海で生計を立てていた。妻は田老の山間部育ち。結婚する際、夫が建て間もない家(土地も)を購入。金婚式直前に震災で被災。

②被災時の状況

自分は宮古の病院に行っていた。夫は堤防を越えた所に浜道具をしまう小屋を持っており年を取ってからはそこで友だちと過ごす事を楽しんでいた。地震発生時にはその堤防の上にとらしく、15人程度がそばにいた。友だちに「かなりの津波が来てここはダメだ。早く逃げっぺすー」と言われたが「ここにいれば大丈夫だ、ここまで来る津波は来ないんだ」と言っていたそうだ。避難所から遺体安置所まで20日通い、21日目に見つけることができた。

③津波に対する意識

夫は第一防潮堤を信じており堤防に上がれば津波は大丈夫と常に言っていた。住んでいた地域は3月3日以外にも年に1回必ず津波避難訓練をやっていた。震災の1年前に当時の自治会長さんが「次は必ず大きい大きい、赤沼山に上がっても流れるような津波が来るから、みなさん、もっともっと山の高い所に上がって行きなさい」と言っていた言葉だけは忘れられない、子供らには何回も何回も教えていこうと思う。今は3月11日に避難訓練があるが、ここでも誰も逃げない、そんなに簡単に津波が忘れられるものか不思議。私は全然そうは思わない。

④今後のこと

みなさんが復興、復興と言うけれど私自身は止まっている、全然前にも進まない。公営住宅で家も窮屈だし復興っていうのは、何かきっかけがあって、あ、これは良いと思うものに出会った時に、そう思い始めるのかもしれない。

(3) ケース3：70代女性、夫が犠牲となる

①世帯と住まいの状況

夫は田老生まれの田老育ち、自分は昭和47年に宮古から田老に嫁いで来た。宮古の実家も今回の津波で無くなった。自宅は夫の父の代に建てたRC造。嫁いで来た時は平屋建てだったが、姑の病気をきっかけに2階を増築した。そこで舅の代から商売をやっていたが火事になり、その後夫はサラリーマンとして20年近く会社勤めをしていた。

②被災時の状況

地震の後に「お前はこの茶箆箆を押さえてろよって、大丈夫、逃げなくてもいい」って、そんな呑気なことをしていた。でも周りから避難を勧められ免許証だけポシェットに入れて家を出た。道路に出たら消防の人が来て、津波は4mだからと言った。それを聞いた夫は「4mなら大丈夫だ。この防波堤も10mはあるし」と言い家の中に戻った。2回目の揺れの後も同様で、3回目の揺れの時も外に出て10分か15分、夫は「やっぱり家さ入って」と言うので戻って、玄関に入ると同時に津波が押し寄せ、自分は台所の柱にぶつかり、階段を手探りで上がった。2階の廊下まで水は来た。夫はその時どこかに流されてしまった。夫は10日目に見つかった。私たちの寝室の上がり窓のところから出てきた。

③津波に対する意識

RC造2階建ての自宅が立派だったために過信していたのかもしれない。常々舅は我が家は岩盤の上に立っているから地震の時にも大丈夫だと言っていた。

④今後のこと

夫をなくして一番嫌だったのは、見つかって10日目の時に郵便配達の人に来てオヤジさん亡くなって500万円儲けたなって言われた。それは言葉の暴力ではないかと言った。500万円貰ったって生きていけば年金でそれ以上貰える、おかしな話をするなって。今避難訓練をして

も自分は逃げない。どこにも逃げようがないし、ここは3階だから津波もここまでは来ないと思う。

(4) ケース 4 : 80 代女性、息子 (40 代) が犠牲となる。高校 2 年生の孫 (男) も同席。

①世帯と住まいの状況

自分とその息子(当時 40 代)、孫(当時小学 5 年生)の 3 人暮らし。舅が建てた家で、自分が嫁いで来た時にはすでに建っていた。息子は田老生まれの田老育ち、代々続く昆布の養殖を仕事としており消防団員であった。入団して 1 年目に震災が起こり、犠牲となる。

②被災時の状況

自分も年を取っているから、息子には消防団には入らないで欲しいと言ったが、人手も足りないし名前だけでも良いから入ってくれと言われ、震災の 1 年前に入団していた。地震後、息子はまず自分を車に乗せて娘の家に送って行った後にハンテンを着て消防団に行った。まず青砂里の水門を閉めた。次いで他の団員と一緒に 4 人で漁協の所の水門を何とか閉めた。ところが堤防の外にいた車が来たので「ここは閉まったからあっちへ回れ」と手招きをしながら堤防の上を走っていたところに津波が堤防を越えて犠牲となった。4 人の団員のうち死亡したのは 2 名、漁協に逃げ込んだ団員は助かった。

③津波に対する意識

自分は昭和 11 年生まれで、チリ地震津波(昭和 35)は見ているが、防浪堤があるおかげで助かったと報道されていた。孫は小学校で繰り返し津波避難訓練を経験しており、震災当日も校庭に集合した後、津波が来たという知らせが小学校に入り、裏山に一斉に走って逃げ全員が無事だった。

④今後のこと

消防団員だから金はいっぱいもらっただろうと言われた。「金は降りたかって」まず言われる。孫は通学の便を考え、宮古高校ではなく北高に進学した。そこでは成績もトップ、生徒会長も務めている。岩手の大学に進学し、学ぶだけ学んでまた田老に戻って働きたいと希望している。宮古市民まちづくりワークショップにもずっと参加しているが、こんな町になるのかなと想像していることに楽しいと言っている。

(5) ケース 5 : 70 代女性、息子 (40 代) が犠牲となる

①世帯と住まいの状況

自分と夫、息子の 3 人暮らし。自宅は田老の駿達地区(山間部)にあり、津波による被災経験はない。息子は漁協のわかめ加工工場長をしており消防団活動中に津波の犠牲となる。ケース 4 で紹介した消防団員と共に活動中に被害にあった。

②被災時の状況

夫が酸素吸入が必要な病気だったため、自分と夫は地震後グリーンピアに避難した。息子は地震後まず、加工工場の職員と共に山王閣の駐車場に避難し、その後山王の入り口の水門に戻った。水門の所で他の消防団員が津波に飲まれたのを見て、その人を助けるために海に飛び込んでそのまま流され犠牲となった。駐車場に避難していた時に、3m の津波という放送を聞いたらしく、海に下がったのではないかと思う。

③津波に対する意識

自分も夫も駿達地区の出身で、家族全員が高台生まれの高台育ちであり、これまでに津波の被災経験はない。ただし昆布やわかめの養殖などを行って生計は海の仕事を立てていた。

④今後のこと

息子を亡くし全然食欲がなくなり、栄養失調になった。でも前向きに生きたい、過去を振り返っても何にもならない、元気に前向きに生きて息子を供養したいと思ってきた。友達に支えられて、今では 1 週間のうちに 5 回くらいはお茶飲みに行くのでほとんど留守にしている。

(6) ケース 6 : 80 代女性、夫が津波で犠牲となる

①世帯と住まいの状況

夫と息子の 3 人暮らし。自分は田老出身だが、津波被害を受けなかった地域から昭和 46 年に嫁いできた。自宅は昭和 8 年の津波の後に建てられている。夫の実家はこの津波以前は赤沼山の近くにあったが、津波の後の区画整理で今の場所に土地を買い求め家を建てた。夫は 50 代半ばまで遠洋漁業の船に乗り、その後は船を持ち近海で漁師をしており、自分も浜に出ている。

②被災時の状況

3 月 9 日の地震で、避難する際に持ち出す物はある程度用意をしていた。3.11 地震発生時は自宅におり、外出中の夫の帰宅を待って、遊びに来ていた娘と共に親子 3 人で赤沼山に逃げた。揺れが収まって 5 分後に避難した。避難途中で津波が 3m という放送があり、その後は停電して放送は聞けなかった。一旦赤沼山に逃げたが夫が「物を忘れたから」と言って戻った。「戻るな戻るな」と騒いだが「大丈夫だ、大丈夫だ。ここまで来るのに 30 分、今の地震ではまだ来ないから大丈夫だ」と、黙って戻っていった。で、そのままだった。うちに着いたか着かないかあたりで第 1 波が来たような気がする。取りに帰ったのは「懐中電灯」、前の日まで持ち出し用に入れていたが、地震が来ないので荷物広げて私が置いて持っただけでよかった。あの時嘘でもいいから持ってきたと言えればよかったのにも思ったりもする。たった一つの忘れ物のために。1 週間後に夫の遺体が見つかった。

③津波に対する意識

自分は小さい時から母親に昭和 8 年の津波の事を聞いて聞かされていた。当時住んでいた家は津波による被害はなかった所だったが、地震が来たら津波がくるから逃げると言われ続けてきた。明治 29 年、昭和 8 年に津波は来なかったから今度来る津波は大きいぞと親に言われていた。結婚後には、家族の下着などを目に付きやすい黄色い風呂敷に包み、春と秋に取り替えて用意をしていた。震災の時に綿入れなどと共に持ち出していた。

(7) ケース 7 : 70 代男性、妻が津波の犠牲となる

①世帯と住まいの状況

自分と妻の 2 人暮らし、どちらも田老出身。自分の実家は田老の高台への避難道路の入り口の所にあったが、昭和 54 年結婚を機に土地を購入し家を建てた。59 歳で遠洋漁業を引退し震災まで 6 年間は陸暮らし、妻は漁協の加工工場に勤めていた。

②被災時の状況

自分は自宅におり、加工場から妻が帰宅するのを待ち、妻が家の片付けよりもう逃げねばならないと言うので長靴、防寒着に着替え携帯ラジオを持って家を出た。避難所に行く途中で孫のために暖房器具を取りに家に戻れと妻が行った。ラジオの放送で「陸前高田に 6m の津波が来た」というのを聞き、妻が再び家に戻れということで、しょうがないと思い U ターンして家に戻った。家の前で妻が「お父さんは指定されている熊野神社にもう行った方が良い。私はトイレに行くから」と言い、一人で家の中に入っていった。自分は避難所に行く途中で堤防の所に津波が見えた。妻が家に入ったからどうしようと思ったが、思い直して走った。3 月 15 日に妻の遺体が見つ

表1 調査結果概要のまとめ

ケース	犠牲者	出身地	被災場所	被災時の状況	津波・避難に関する意識
1	50代男性	生まれ育ちは田老の高台、結婚後に今の場所に	自宅そばの土手の上	地震発生直後自宅にいたことは確認されているがその後の避難の有無は不明。自宅そばの土手の上で犠牲となっていた	自分の親から、ここなら裏に山があるから大丈夫と言われており、本人も自宅の裏山に避難すると常に言っていた
2	70代男性	生まれ育ち共に田老の海岸部	第1防潮堤の上	十数人の人々と防潮堤の上で海の様子を見ていた。友人に早く逃げろと言われたが、ここにいれば大丈夫と答えていた	慣れ親しんだ防潮堤わきの浜小屋に行くのが楽しみで、堤防に上がれば津波は大丈夫と常に言っていた
3	70代男性	生まれ育ち共に田老の海岸部	自宅前	家の外で様子を見ていたが消防に津波は4mと言われ、揺れるたびに家の外に出たが避難は不要と判断した	RC造2階建ての自宅は地盤も良く、自宅にいれば大丈夫と考えていたのではないかと
4	40代男性	生まれ育ち共に田老の海岸部	第1防潮堤の上	母親を避難させた後、消防団員として2つの水門閉鎖。その後逃げ遅れた車を誘導するため防潮堤の上を走っていた。	水門閉鎖後、取り残された車を誘導するため堤防上を走っていた
5	40代男性	生まれ育ち共に田老の山間部	第1防潮堤の上	職場の従業員を避難させた後、消防団員として下に下がり水門閉鎖。その後津波に流された団員を救うため海に飛び込んだ。	一旦避難した所で3mの津波という放送を聞いている。津波に流された消防団員救助のため海に飛び込んだ。
6	70代男性	生まれ育ち共に田老の海岸部	自宅前	避難途中で3mの津波という放送を聞いている。一旦高台に避難後、懐中電灯をとりに戻ったところ	津波は3mという放送を聞き、到達時間までまだ時間があると判断した。
7	60代女性	生まれ育ちは田老の高台、結婚後に今の場所に	自宅前	すぐ避難しようと夫を促し、夫と車で避難途中、なぜか物を取りに戻ると主張し家に戻り、夫より一足遅れて避難しようとしていた	姑から津波の話聞いており高台へ逃げろと言われていたし持出し品も用意していた。陸前高田に6mの津波という放送を聞いた。

った。取りに戻ったリュックを持ち靴を履いた状態で発見されたので、家から出てすぐの所で津波に遭ったのではないかと思う。

③津波に対する意識

自分の母親は昭和8年の津波で命辛々助かった経験があり、自分も妻に大きな津波が来たら高台へ逃げろと言っていた。妻は田老でも高台の方の出身だったが、自分と結婚後は自分の母から津波の話は度々聞いており、持ち出し用のリュックも用意していた。3月9日の地震で津波警報が出た時に妻が「避難どうしようか」と言ったが、「堤防が二重になっているから大丈夫だ」と自分は答えた。今振り返れば自分の判断も悪かった。行政は外側の堤防は高潮対策だと言っていたが、我々は二重になった津波対策の堤防だと思っていた。自責の念にかられ1年は本当に泣いた。当事者にしか分からない、この胸が痛くなる。

④今後のこと

震災から1年後に、孫のために買っておいた土地に家を建て、1人で住んでいる。孫の転校の問題があり、すぐにはここで同居できないが、将来は誰か戻ってくるかもしれない。震災前からやっていた人材センターの仕事で、現在は総合事務所の宿直や巡回業務をしている。一人で家にいるより良かったと思う。

5. まとめ

対象とした7件の津波による犠牲者を対象とした調査結果から明らかとなった事実をいかにまとめる。

- ・犠牲となった場所は自宅前あるいは自宅傍が4ケース、防潮堤場が3ケースであり、避難の移動中で津波に巻き込まれた事例はなかった。
- ・対象者全員が生まれ育ち共に田老であった。このため、過去の津波災害が語り継がれており、避難の必要性も十分に認識していた。
- ・昭和8年三陸地震津波の被害と避難の必要性を、子どもの頃に親から直接聞かされていたことが津波防災の意識向上に大きな役割を果たしていた。
- ・長い期間をかけて2本の防潮堤が築かれてきたこと、防潮堤の高さが10mあったこと等が防潮堤への絶対的な信頼感を生んでいた。
- ・避難途中で3mあるいは4mという津波予想の情報を聞いている例が4ケースあり、この情報がその後の避難行動の判断に影響を与えていた。
- ・これにより、ここなら大丈夫とそこにとどまった例が3ケース、時間があると物を取りに戻った例が2ケースあり、それが犠牲発生につながった。

・一方、消防団活動中に殉職した例が2ケースある。どちらも水門閉鎖の作業は完了していたが、その後に人命救助活動を行っている最中に犠牲となっていた。

・家族が犠牲になったことで「金をもらっただろう」と心無い言葉をかけられた例が3ケースあり、悲しみに加え非常に嫌な思いを経験していた。

・残された家族にとって震災から6年が経過しても、復興という言葉が我が事として実感されるに至っていない。一方、調査中に唯一、若者(現在高校生)からはまちづくりWSにも積極的に参加しており将来の田老のまちの姿を考えることは楽しいという言葉が聞かれた。

本研究では、調査にご協力いただいた7世帯の方たちから得られた結果を取りまとめた。東日本大震災以降、津波による被害発生過程を解明する多くの研究が実施されており、今回得られた成果も既往研究で指摘されていることと同一の内容も含まれている。今後、調査にご協力いただける方の数をさらに増やし、また多様なケースを対象として具体的な事例を集め、記録し、その成果の活用方法を含めた研究に発展させていきたい。

謝辞

本研究を実施するにあたり、宮古市危機管理課職員の皆様、宮古市社会福祉協議会会長赤沼様ならびに調査に協力していただいた8名の宮古市民の皆様には多大なるご協力をいただきました。ここに記して深く感謝申し上げます。また本研究は、平成28年度科学研究費助成事「津波による犠牲者はなぜ発生したのか？質的調査に基づくメカニズムの解明」(研究代表者：重川希志依)」の成果を含むものです。

参考文献

- 1)東日本大震災津波避難行動東査団(代表：今村文彦)による調査成果
- 2)内閣府津波避難対策ワーキンググループ資料2012